

はじめての音

Wedge White

はじめての音

「妾の初体験か……？はあ……男子としてそれは気になるものなのかう。それとも、深く人と関わって来なかったというのに、そういう関係に進んだ相手がいることが不思議なのか？まあ、それもそうかもしれないな。じゃが、妾は何も愛し合った者としたという訳ではない。いや、その……な。妾も女として生まれた以上はやはり、興味があつたのじゃ。男にしかないモノや、それを自分の体に受け入れた時に得られるという快感にな……」。

それに、じゃ。妾は人前に滅多に姿を現さなかったが、それは大人に限った話じゃ。童の前にはよく顔を出し、共に遊んだりしておったぞ。——そういう訳で、じゃな。関係を持ったのも若い男子だったのじゃ」

*

「ぼく、最近変なんだ……」

「ふむ？変とは、どのように体がおかしいのじゃ？病気だというのなら、薬になる草はある程度わかつておるぞ。それとも……」

妾が佳子と別れてから、いくつかの時代が過ぎた後。ある山間の村に長居することがあった。その少年の一人に、妙に妾を意識してくる者がいて……まだ精通もしていない幼子ではあったが、どうにも妾に興奮しているらしい。

からかうようにそう言つて。彼の反応を待つてみた。

「桐ちゃんと会つたり、桐ちゃんのことを考えたり擦ると、なんだか、こうつ、体がかあーつて熱くなつて……！それで、桐ちゃんともつと仲良くなりたくなつて……」

「もう十分に仲は良いではないか？たくさん遊んで、妾はお前を友人と思つておるぞ」

「そ、そうじゃなくつて……！」

彼は顔を赤くして言う。……可愛らしい。

「桐ちゃんの、特別になりたいんだ……」

「特別、のう。では、二人でしかない遊びをするか？これは男子と女子、二人でなければできぬことじゃ。それも、互いを大切に思い合う……特別な関係でなければできぬ」

「そ、そんなことがあるの!?そ、それで、桐ちゃんはぼくのこと……」

「うむ。憎からず思っておるよ。そうでなければこんな提案、せんじやろう」

「じゃ、じゃあ……!!」

ぱあつ、と彼の顔が明るく、興奮に彩られる。

……全く、男子とは単純なものだと思ひながら。しかし、妾自身も胸が高鳴らない訳ではなかった。

「とにかく、じゃ。これは他人に見られてはならぬ、二人きりでしなければならぬことなのじゃ。確か村外れに今は使われていない蔵があつたじやろう？そこでしよう。少々古臭いが、まあ今すぐに崩れるようなものでもあるまい」

「う、うんっ！二人だけの秘密、だね！」

「うむ。秘密じゃ。決して誰にも言つてはならぬぞ？それが約束できるな？」

「うんっ。桐ちゃんとだけの秘密!!」

妾はいつまでも幼子の姿をしている。だが、もう何百年も生きていた訳で、当然ながら見た目と精神での年齢の乖離は起きていた。

しかし、妾自身が初めてのこと、少々舞い上がっていたのは間違いない。彼と同じように

興奮し、ドキドキし……蔵へ向かった。

ちなみに、当時は衛生がどうかという知識はなかったので、見るからに不衛生な蔵で裸になることが問題だとは感じなかった。むしろ、ちょうどよい隠れ家で……素敵とすら思っていたと思う。

「うむ、ここならばよいな。して……どうしたものか」

「えっ？な、何をするの？」

「ええと、じゃな……妾も知識としては知っているのじゃが、具体的にどうするのかは……とにかく、じゃ。下半身を見せてはくれんか？」

「えっ……？そ、それって桐ちゃん裸、見せるってこと？」

「うむ、そうなる……のう」

当然のように彼は赤面し、もじもじとして……しかし、どこか期待も混じった涙目で妾の方を見る。

「桐ちゃんは、ぼくの裸、見たい？」

「興味はある、の……逆にお前は妾の裸が見たいか？」

「うん……見たい、な……」

「ならば……」

妾自身、胸が高鳴っている。明らかに顔が赤くなっているのもわかり、舞い上がる中……こ

う言った。

「一緒に裸になろうか」

「うんっ……!!」

幼い者同士。妾は長く生きているといえど、性的な知識をほとんど持ち合わせていない、初めて同士の初々しい行動だった。

おずおずと着物を脱ぎ、互いの裸を晒す。当然、相手の一物は小さな、子どものものであり、勃起もしていなかった。しかし……。

「き、桐ちゃんの体、きれい………」

「そうかのう？あまり他人と比較できるものだし、違いがわからぬが……」

「でも、すごくきれいだよ！すっごく可愛い!!」

「ふ、ふふっ……そう言われて悪い気はせんのか。お前の裸も……うむ、可愛いと思うぞ」
「うあっ………」

「な、なんじゃ？」

ビクリ、と股間のモノが震える。幼いながらも異性。それも愛しく思う相手の裸を見て、本能的に男として興奮しているのだろう。

それを見て妾もまた、一層気分が高まってきてしまう。

「な、なにこれっ……？おしっこしたい訳でもないのにつ……！んんっ……!!」

そして、そのままモノは小さいながらも屹立し始める。小さいと言っても、妾の体も小さいのだから丁度いい大きさなのかもしれないが……。

「それはな、お前が妾に興奮しておる証拠じゃ。このちんぽをな……こうやって触られたりすると、心地いいじやろう？」

「ふあああつ!? な、なに、これっ……!? こんな、初めてっ……!!」
軽く肉竿を小突いてやると、それだけで激しく感じる。

思った以上に男子は弱いものだ、と思わず得意になつてしまい、更に刺激していく。

「ふふふっ、こうやって女子にちんぽを心地よくさせられる……これが男女二人きりでする“秘密のこと”じゃ。本当は大人がすることなのじゃがな、しかし、お前は妾が好きなのじやろう？」

「う、うんっ……! うっ、ふあああつ!! だ、大好きだよ、桐ちゃんっ……! 気持ちいいのもつ、んふあつ!! すきっ……!」

「そうか、そうか……妾も可愛く喘いでいるお前が好きじゃ。このままもつと心地よくさせてやってもよいか？」

「うんっ……!! もつと、もつと欲しいようっ!!」

「うむうむ、そうか。では……」

きゆうっ、と根本近くを握り、そのまま先端までしごいていく……。

「ふあああんっ！いい、いいよっ、それっ……!!すごくっ……ううっ!!」

「ふふっ、ちんぽがビクビク震えよる……それにすごく温かい……」

「あつ、あああつ……!!ど、どうしよっ?おしっこ、漏れそうっ……!!」

「なっ?!いい、いや、それは我慢してくれんか!?お前のおしっこ塗れにはなりたくないぞ……」

「ご、ごめんねっ!で、でもっ……!!」

「うひゃあああつ!」

突然、皮被りの先端からじわりっ、と半透明の液体が流れ出した。

ドロツとしたそれは、ちんぽを掴んだ妾の指を垂れ落ちていく。

「あ、れっ……?おしっこじゃない……?」

「これは……精液というもののじやろうな。ふふっ、お前は今までこんなものを出したこと
がなからう?妾が初めてお前を大人の男にしてやった、ということじやな」

「こ、これが大人になったってこと……?」

「うむ。それが子種、赤ちゃんを作るために必要なものらしいのじや。それを女子の中に出す
ことで、子を授かれるという……まあ、手では子どもなどできぬから、これは無駄撃ちとい
うものじやが」

「そ、そうなんだ……桐ちゃん、なんでも知ってるんだね」

「ふふっ、お前より少しばかり長く生きておるからな。どれっ……れろっ、ちゆるうっ……ん、

んむうつ……味はあまり美味くはないのう」

「ええっ!? そ、そんなの舐めていいの!?」

目を丸くする彼を見て微笑ましく思いながら、しかし想像以上の酷い味に少し落胆する妾がいた。もつとこう、女子が男子を気持ちよくさせた証なのだから、上等な味なのを想像していた。これでは、あまり飲みたいとは思えない。

「……しかし、妾も一通りのことは経験したいからな」

「えっ?」

「今、妾は手でちんぽを気持ちよくさせたがな……これを口で啜えるやり方もあるのじゃ。それを試してみよう」

「お、おちんちん啜えるの……?」

「うむ……少し覚悟はいるがの。しかし、できるだけことはやりたい。してもよいか?」

「い、いいけど……でも……桐ちゃんに酷いことはしたくないから……」

「気にせんでよい。妾がしたいと言っていることなのじゃ。お前が罪悪感を覚える必要はなからう」

「で、でも……んふあっ!? あっ、ああっ……!? こ、これっ……!! くっ、ふあああっ!?」

「んむむうつ……!! れろおっ……れろじゅっ、ちゅるっ、じゅるじゅるっ……んむっ、ふうっ……んふっ、なはなはっ……おもひろい感覚じゃっ……」

「く、口の中、震えてっ……！ふああああっ!!」

小さいモノとはいえ、妾が咥えるとともに喋れないほど口内がふさがってしまった。

まだ少し、精液の絡みついているモノは、やはりまずかったが……だが、不思議とちんぽを咥える、その行為自体は嫌だという感じがしなかった。彼が喜んでくれるのが嬉しかったのだらう。

「じゆるじゅっ……れろっ、れるむううっ……じゅっ、じゅっちゅっ、じゆるるううっ!!」

「き、桐ちやつ!!ごめっ、また出っ……!!くっうううんっ!!」

「んむうううんっ!?!むっ、んあむうううっ!?!」

突然、震え出したモノが精液を吐き出して……ぴゅっ、ぴゅっ、と中々切れない尿のように飛び出した精液は、量は少なかったがそのえぐみを口内に残していき……思わず吐き出してしまいそうになったが、それは彼に失礼だから……頑張つて飲み下す。

「んんっ……んじゅっ、ずずるうっ……んっ、むうっ……」

「あっ、ああっ……桐ちゃん、飲んじやつた……?」

「あむうっ……んっ、この通りじやつ……ああんっ……」

「そ、そんな口を開けて見せるなんて……は、恥ずかしいよっ……」

「んふっ、可愛いのお、お前は。しかし、うむ……妾もわかつてきたぞ。ちんぽというのは本当に敏感なんじゃない」

「う、うんっ……ぼくも初めて知ったよ……こんなに気持ちよくなれるんだ………」

「お互い初めて同士、貴重な体験ができているのう。——さあ、そろそろ本番と行くか」

「本番……?」

きよとんとした顔で妾を見る彼が可愛らしい。

「うむ。子作りの本番じゃ。まあ、妾たちは子どもゆえ、まだ実際に子どもを作れはせんのだやがな。妾の親たちがしていたのと同じことをしよう」

当然ながら、嘘だった。妾は今の姿で成熟していると言えるが、人間との子どもは作れない。いや、そもそも座敷童自体が子どもを作らない種族だ。

そして、妾に親がいるというのも嘘。しかし、今の妾はあくまで彼の友達、ただの人間の女の子でありたかった。

「と、父ちゃんたちがしてたこと……いいの?」

「そっちこそ。妾はしても構わんと思っておるぞ?」

「そ、それなら、ぼくも……桐ちゃんと子作りごっこ、してみたい!」

「ふふっ、ごっこ、か。うむ。ごっこ遊びだが、こういうのは経験を積んでおくのに越したことはないな。楽しもうな。由兵衛（ゆうべえ）」

「う、うんっ……!」

これまで一度も名前を呼んでいなかった妾が、突然名前を呼んだことに驚いているのだろう。

戸惑ったように笑い、しかし、嬉しそうにしていた。

「そのちんぽをな、妾のここに挿れるのじゃ。どうじゃ、わかるか？言っておくが、挿れる穴を間違えるでないぞ……」

「えっ!?お、女の子ってこんな風になってるんだ……!」

「うむ、ちんぽが女子にないことは知っていたが、実際にどうなっているかは知らなかったじやろう?この穴、じゃ。自分で挿れられるか?」

「え、えつと……」

もじもじとする彼。可愛らしいが、いつまでも待つてはいられないので……思い切つて妾の方から飛び込むようにしてすり寄る。

「うわっ……!」

「じつとしておれ。妾が導いてやろう……んっ!」

「あつ、ああつ……桐ちゃんのここ、濡れてる……?」

「うむ……お前が子種汁を出したように、女子もまたちんぽを受け入れるため、こういったものを出すのじゃ……興奮しているとたくさん出るのじゃぞ」

「桐ちゃん、すつごくいっぱい……興奮してくれてるの?」

「うむっ……」

自分ではわかつていたことだが、改めてそう言われて……恥ずかしくて赤面してしまう。

だが、だからこそ早く彼を中で迎え入れたくて……思い切つて腰を持ち上げ、先端を咥え込んでいく。

「うつ、くううつ……!!」

「うあああつ!?き、桐ちゃんっ……!!」

「んっ、ふふっ……濡れているとはいえ、これは中々大変そうじやなっ……。だが、安心せい……きちんと気持ちよくさせてやるから、なっ……!うつ、くあああつ……!!」

入り口で彼のモノを咥えたことを確認して、一気に腰を下ろす。

未経験の中が押し広げられていくのを感じるのと共に、勢いよく下ろしたものだから……ぶつんっ、と中で何かが切れたような感覚と共に、鋭い痛みが走った。

「き、桐ちゃん、血がっ……!!?怪我してるの……?」

「んっ、くっ、うあつ……!!だ、大丈夫じゃ……こういつたことを初めてする女子はな、こうして血が出るものでな……。んっ、ふうっ……痛みもあるが、これがお前に妾の初めてをあげられた証じゃ。むしろ誇りに思つてほしい」

「ぼくが、桐ちゃんの初めて……」

「うむ。そして妾はお前の初めての相手じゃぞ。こんなに可愛い娘と初めてを経験できたのじや。ありがたく思うんじやぞ?」

「うんっ……桐ちゃん、大好きっ……」

さすがに処女喪失後、すぐに動くこともできず、そんなことを言いながら……幸せそうな彼の顔を見つめる。……妾も同じような顔をしているのだろうか。

だが、少しだけ寂しさもある。彼にとつてこれは間違ひなく性行為だが、妾は人との子を作れないのだから、妾にとつてのこれは予行練習ですらない、ただの「ごっこ遊び」だった。

「（しかし、こうやって気持ちよきそうにして喜ぶこやつの顔を見ただけで嬉しい、な……。他の生き物は交尾に命すらかけるというに、人はそれを娯楽ともするようじゃし、のう）」

呆れたような、感心したような。しかし、彼があんまりに嬉しそうだから。

「んっ、よい、しよっ……少し動こうか。中に挿れただけでは子種を出せないじゃろう？」

「う、うんっ……。でも、ぼくは桐ちゃんとながつてただで嬉しい、よ？」

「甘えた目で見るといい。子種をちゃんと出してこそその行為じゃ。そら、動く、ぞっ……！ うっ、くうっ……！」

腰を持ち上げ、彼のモノが中を通過していく感覚を味わう……残念ながら、初めてだからなのか、妾が人ではないからなのか、快感を覚えることはできない。しかし、彼は気持ちよきそうに目を細めた。

「うっ、ふああっ……！ い、いいよ、桐ちゃんっ……！ 桐ちゃんの中、絡みついてっ……！ くっ、ううううっ……！！」

「ふ、ふふっ……よっ！ ほどいいんじゃない？ ほれ、もっと動かしてやろう……思い切り出してく

れて構わんど？どの道、妾たちは子ども。本当に子作りはできんのじゃ」

「うっ、ううううっ……!!」

持ち上げた腰を下ろすと、ぱちゅんっ、という水音がした。それが頭の奥にまで響くようで

……快楽はなくとも、興奮が加速する。

「んっ、くうっ、ふっうううっ……!!ほれ、どうじゃっ……？妾とできて、嬉しいか……？」

「うんっ、嬉しいよっ……大好き……!!桐ちゃん、桐ちゃんっ……!!」

「うっ、くあっ、んっ……!!な、中でもっと大きくっ……も、もうっ、中がお前でいっぱいじゃっ……」

「はあっ、はあ、はあああんっ……!!ご、ごめんっ……!もつと桐ちゃんと楽しみたいんだけど……!で、出るっ……!!」

「うむっ……存分に出すがよい……。早いなどと軽蔑はせんぞ。むしろ、可愛いお前が見れて満足じゃ」

「あっ、ああああ!!」

「んふっ……!!」

ビクンツ、中で肉棒が激しく脈打ち、膣壁が密着しているためか、その中を精液が駆け上がつていくのがわかる。そして、先端から吹き出せば……。

「あっ、ああっ……!!こ、これえっ……!!い、今までよりずっと多いっ……!!」

「あつ、あああああつ！と、止まらないよおつ……!!」

「はあつ、あつ、あああつ……!!お、溺れてしまうつ……!中あつ、あふれるうつ！」

肉棒はどんどん妾の中に精液を送り込んでいき……やがてそれが止まると、なんとも言えない充足感と、本当に彼と性交をしたのだという……満足、だろうか。そんな気持ち溢れてきた。

「あつ、あつ、ああつ………」

「もうつ、女子の方にこそ負担がかかるだろうに、お前の方が息切れしてどうする？妾はまだ元気じゃぞ」

「ご、ごめつ……でも、桐ちゃんに……大好きな桐ちゃんに赤ちゃんのもと出せると思うと、それが嬉しくて……。いっぱい、出しちゃった……」

「そうか、そうか。可愛い子じゃな……」

荒い息をしている彼の頭を、妾は優しく撫でた。まだ中に彼を感じているというのに、赤子をあやすように頭を撫でていると、妙な気持ちになってくる。しかし……。

「（妾からすれば、どんな人間の老人も赤子同然じゃな。……うむ。妾は人の母と考えていいのかもしれない）」

そんな気持ちながして、いつまでも彼をあやし続けていた。

「おーい、そろそろ帰るぞ。陽が落ちてしまう」

「う、うんっ……………あのさ、桐ちゃん。ぼくだけ楽しんじやったけど…………大丈夫？痛くない？」

「そうじゃなあ…………正直、まだ少し痛い気がするのう」

「や、やっぱり……………」

行為の後。着衣を正した後、申し訳無さそうに彼が見てくる。

「しかし、な。これは幸せな痛みだと思う。この痛みが妾とお前の…………愛の証じゃ。ただの子ども遊びかもしれない。しかし、たしかに今日、妾とお前は結ばれたのじゃ。…………本当に妾たちが結婚をできるという訳ではない。しかし、体と心が間違いなく通じていた。…………お前も、そう思うじやろ？」

「う、うんっ…………ちよつと難しいけど…………ぼくは桐ちゃんが大好きだよ。それは間違いない……………」

「ふふっ、まだまだ坊やには難しかったかのう？」

「き、桐ちゃん……………」

そうやって笑って。二人で手をつないで帰った。

まだ膣内には精液が残っている感覚があり、膣口からは精液が垂れている心地がしたが…………むしろだからこそ、今日の特別さを感じられて嬉しかった。

「さて、また明日、な。……………何度でも言うが、今日のことは秘密じゃぞ？誰かに話したらもう二度と会ってやらんからな？」

「う、うんっ……………桐ちゃんが大好きだから、秘密にしてる……………」

「ふふっ、そうかそうか。ならば妾もずっと、お前の傍にしよう。ずっと、な」

結局、彼と行爲をしたのはその一回きりで。それから普通の友達として過ごした後、彼が青年になる頃にはもう、妾は彼の目の前からいなくなっていた。

しかし、その日の約束の通り、彼が幸せな天寿を全うするまで。

妾はこの村にいて、彼らを見守り続けていた。

はじめての音

2019年12月 5日 初版

奥 付

著者 Wedge White
URL <https://wedgewhite-team.wixsite.com/home>
E-Mail konjyoyasuhiro@gmail.com

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
(<http://tokimi.sylphid.jp/>)